『恋路ゆかしき大将』の成立

——その語句の特徴をめぐって——

田淵福子

序

散佚物語として、永く世に忘れられていた『恋路ゆかしき大将』は、昭和初期に九条家旧蔵・金子武雄氏蔵本（以下、金子本と称す）が、また戦後になって、金子本を補う形の宮内庁書陵部蔵本（以下、桂宮本と称す）が、相次いで発見されたことにより、漸くその全貌がほぼ明らかになった。

しかし、その成立時期に就いては、それを示す外証に極めて乏しく、『無名草子』や『風葉和歌集』に本書の名が見えないことなどから、通説では『風葉和歌集』（文永八年一二七一年）以後、鎌倉後期の作とされるものの、室町時代説も存在し、なお推論を重ねざるを得ない段階にあると言えよう。

本稿では、かかる面に注目し、本物語の表現用語の特徴を通して、その成立年代についていささか考察を加えてみたい。

一

本物語は、その冒頭文、

○ちよのかずとるらんたきのしらたまのながれなればにや、身をばあらしの山かぜにさそはれて水のあはともきえなんとおもひ入にしとし月も、かぞふれば十とせあまりにもなりにけり。（金子本四二七頁——笠間書院刊『物語文学の研究』の頁数。以下、金子本からの引用は同書による。）

に代表されるように、王朝物語の流れを汲む流麗な文章で構成されているが、その一方では、「畏気」「式」「念なし」「面々」などといった、王朝物語には特殊な、中世的な印象の強い語句を数多く含んでいる。平安末・鎌倉時代物語の文章が、古典的な色彩を保ちながらも、その制作当時の通用語をも多く混入した形で形成されていることは周知の通りであるが、だとすれば、そうした特殊な語句の通用年代との関わりから、本物語の成立時期について考察を加えることも、一つの有効な方法ではあると言えよう。

まず順序として、そうした特殊な語句が、どのような作品に見られるか、といったことをもとに、それらの使用時期の大勢を把握しておきたい。

〈表一〉は、平安～室町末期頃に成立した主な作品について、『恋路ゆかしき大将』に見える特殊な語句三二語の用例の有無を調査した結果をまとめたものである。なお、作品の配列は大凡その成立順とし、成立年代の明らかでないものについては、通説に従って並べてある。また、〈表二〉は、〈表一〉に示した調査結果について、作品をジャンル別に編成し直して作成したものである。

〈表一〉を一見して理解できることは、ここに掲げた語句の用例の殆んどが鎌倉時代以後、特に鎌倉中期以後の作品に集中しているということである。また、仮名文以外の作品には比較的古くから見える語であっても、仮名文における用例を見出し得るのは、やはり鎌倉中期以後にまで下る場合も多く、本物語は語句の面から見て、王朝的な色彩とは著しい異なりを見せていると言える。さらに、〈表二〉からは、こうした語句の用例が物語の類には少なく、軍記物や説話文学の類に多いことが理解される。このことは、本物語が古歌や古物語の一節を踏まえた美文で綴られていながらも、その文章の所々に漢語や俗語の混入が見られることを示すものであろう。物語文学から御伽草子へ、という流れの中で、多くの王朝物語がそうであったように、本物語もまた、平安朝の和文を離れた、独自なものへと変貌しつつある文章によって構成されているのである。

以上述べたように、〈表一〉及び〈表二〉から、『恋路ゆかしき大将』は、語句の面で鎌倉時代物語としての特徴を有していることが理解できる。しかしながら、それらの語句を本物語の成立年代と絡めて考えるには、用例の見える作品の成立年代や属するジャンルはもとより、その文体や本文の異同などをも、当然考慮に入れる必要があろう。以下、本物語の成立を考察する上で、特に重要であると考えられる語句をとり上げ、検討を

加えたい。

二

1　いや

本物語には、否定の応答語、或いは不快な気持ちを表わす語である「いや」が、五例認められる。

A、うちほゝえみて、さもともいやとも、たゞいまはきこえ給はぬ御さまぞ、（金子本四四〇頁――傍線は筆者、以下同然）

B、あかずいやとおぼしたり。（同右、四四五頁）

C、「これが又御心に入て侍か」と申給へば、「いや」とうちの給はせたる（同右、四五六頁）

D、いだきこえ給へば、「いや」とて、さすがにつゝましくおぼしたる（同右、四五八頁）

E、「いや〳〵、おとゞの心をばいかゞたがへん。（後略）」（同右、四六四頁）

前者の意味にはA・C・Eが、後者の意味にはB・Dが、それぞれ該当するが、平安時代にはかかる語は見えず、否定の応答語としては「いな」が、不快を表わす語としては「にくし」「口惜し」などが、専ら用いられていたようである。『大言海』は、不快の意を表わす「いや」の例として、

○落窪物語四　「北ノ方、いやいや、継子ノ徳ヲナム見ル、（後略）」

を挙げ、『俚言集覧』も同様の箇所を指摘するが、全集本の[註1]にあるように、この「いやいや」は「いよいよ」の意と解されるので、用例として採らない。

さて、拒否・不快の意を表わす「いや」は、一三世紀中期成立の『古今著聞集』、続く後期の『沙石集』に、それぞれ用例が見え、それ以後の作品にも散見されるが、その殆んどは説話集と軍記物に集中している。「いや」は「いな」の転であるとする説が一般的でもあり、この語は当時の俗語であったとも言えるのではなかろうか。一方、仮名文学においては、『とはずがたり』に一例が見える。

○墨染の袂は殊にいやと戒めらるゝも悲しけれど、（風間書房刊『とはずがたり全釈』七一三頁）

これが、鎌倉期の和文では唯一とも言うべき例であるが、この作者が後深草院二条という貴族女性であることを考慮に入れれば、この時期には和文の用語として、ある程度は「いや」が

用いられていたと見て差し支えなかろう。だとすれば、この語の使用開始時期は、鎌倉中期～後期頃と考え得るのではなかろうか。

Ⅱ　「御」＋〔純粋な形容詞〕

純粋な形容詞が、接頭語「御」に接続した形として、「御おとなし」なる語が一例見える。

○ことのほか御をとなしう、いよ／＼心まどひぬべし。（金子本四五〇頁）

名詞と形容詞が複合したものに「御」を冠した形の語は、既に指摘されているように、古くから比較的多く認められるが、本物語に見えるような、「御」＋〔純粋な形容詞〕の形は、鎌倉時代においては稀である。覚一本系の『平家物語』には、

○先帝の昔もや御恋しくおぼしめされけん、（岩波書店刊日本古典文学大系、上、一一〇頁――以下、特に記さない限り、引用は大系本による）

○いつしかたれ／＼も御恋しうこそ候へ（下、三九八頁）

○世を捨る御身といひながら、御いたはしうこそ（下、四三一頁）

と三例が見える他、『発心集』『沙石集』『とはずがたり』など少数の作品に認められるものの、いずれも後世の転写本しか現存しないことから、従来は転写の際に「御」が付加されたものとして扱われてきた。しかし、近藤政美氏[2]が、鎌倉末期の古文書にこの語法が存することを指摘され、

○鎌倉後期には、鎌倉を中心とする地方の武将、僧侶の範囲にとどまらず、実際にはもっと広い範囲にわたってこのような表現が行われていたであろうと推測している。

と、それまでの説を否定された。このように、かかる語法が広まったのは、鎌倉時代後期頃とされている。或いは、もう少し溯ることも可能かもしれないが、用例の少なさから推しても、鎌倉中期より前とは考え難い。

さて、物語の分野においては、古くは前田家本『うつほ物語』嵯峨院巻[3]に、「御うらめしく」なる表記が見えるが、「人々らめしてカ」と注記がある上、全書本では該当箇所が「人人召して」（一、二七〇頁）とあるなど、この場合は何らかの誤写である可能性が強い。この例を除けば、『夢の通ひ路』物語に見られる、

○御いたはしき事ながら、爰にぞ住つき給へ（福武書店刊『夢の通ひ路』一四〇頁）

の一例及び、『松陰中納言物語』に見える、

○御恋しうおぼし出され給ひけるにや、（古典文庫本、翻刻編四四頁）

○御いたはしく見給ひて、おもひかへし給へり。（同右、一四一頁）

○御恋しう思ひ奉りては、（同右、一四三頁）

○御いたはしくこそ覚ゆれ。（同右、一六六頁）

の四例があるのみで、やはりこの分野においては極めて稀な用法であると言える。特に、この両物語は成立年代がかなり下る[4]ものとされており、そういった意味で、この語法が一例とはいえ本物語に見えることは、興味深い問題であると言えよう。

Ⅲ　景気

本物語中に、「景気」なる語は二例見える。

A、しづやかにうちきこえ給へる御けいきぞ、あらまほしうしみふかき。（金子本、四三五頁）

B、とばどのゝけいき、中じまの夏こだちすゞしくて、（同右、四五二頁）

Aは「人間の様子」、Bは「自然の様子」の意を持つものであるが、かかる語は、調査した限りにおいては、平安時代の和文には見当たらず、それらの作品においては、すべて「景気」のかわりに「けしき」が使われている。

では、この語はいつ頃から和文に用いられるようになったのであろうか。既に佐藤亨氏[5]が指摘しておられるように、中国では『文選』などにおいて、「自然の景色・様子」の意で用いられており、また我が国でも漢詩文には古くから見られる。しかし、漢文以外においてその用例が見えるのは、調べた範囲では鎌倉時代に入ってからであり、建久末頃（一一九五年頃）の『慈鎮和尚自歌合』の跋文（判者藤原俊成）には、

○よき歌になりぬれば、其の詞すがたのほかに景気のそひたるやうなることあるにや。（新校群書類従和歌部四、二一三頁）

と見える。北住敏夫氏[6]によれば、この語を歌論に取り入れたのは、俊成が最初である。北住氏は、歌論における「景気」について、

○歌の詞や姿を通して（中略）浮び上る直観像が、即ち景気に外ならない。景気として示された例を見ると、いづれも自然の風物であり、しかもすべて色も形も定かならぬ観があって、微茫たる情調に包まれてゐるのを特色とする。

としておられ、この語は歌論においては専ら自然に関わって用いられたことが理解できる。また、『無名抄』『後鳥羽院御口

伝』などの歌論書にもこの「景気」が見え、俊成以後、歌学においては、この語が「自然の様子」を表わす術語として、広く行われていたらしい。

一方、その他の和文においてはどうであろうか。この語は、俗語体の『愚管抄』や和漢混淆文体の『平家物語』にその早い時期の用例が見え、少数ながら「人間の様子」を表わすものも見えるが、純粋な和文においては、前述の如く専ら「けしき」が用いられている。ところが、鎌倉中期以後になると、

○風すずしく吹きて、けいきおもしろく侍りしかば（大修館書店刊『弁内侍日記新註　増訂版』三頁）

など、七例の見える『弁内侍日記』をはじめとして、この語は一般の和文にも散見されるようになる。しかし、物語の範囲に限れば、調査の限りでは、『風に紅葉』の三例があるのみである。

○月の光をまはゆけにもてなし給へるけいきなと、（『桂宮本叢書一七　物語三』一六四頁）

○もてつけえんなるよのけいき也、（同右、一七五頁）

○うつくしけにいうなるけいきして、（同右、二三六頁）

これら以外には見出し得ず、この分野ではあまり広く行われなかったであろうと想像される。

このように、和文において「景気」は鎌倉中期頃には広まっていたようであるが、物語の用語としては伝統のあるものとは言い難い。かかる語を、本物語中に二例見出し得ることは、注目すべきであろう。

Ⅳ　式

本物語に見える「式」なる語は、四例である。

A、太上天皇とせうろくの臣とは、むかへざにゐるべき事なるを、しら川の法皇よりして、そのしきやぶれにしかど、（金子本四六五頁）

B、「せめて身のうきをのこしてふるゆきにみちまどはして返かねつる。しきも身づからことさらにまいりて」など、はしりがき給。（同右、四八九頁）

C、今上一宮のいてきさせ給へらんきしきは、猶れいの事まて、これほとめつらかに、ひかりとなる御しきはなくや（桂宮本三一八頁――『桂宮本叢書一六　物語二』の頁数。以下、桂宮本からの引用は同書による。）

D、これへおやさまなるしきにてわたしたてまつ□[9]給へり、（同右、三四八頁）

A・Dは定まった形式や体裁、Bは事情・有様、Cは儀式の意を表わすが、この語については、夙に指摘[7]されているように、『徒然草』に、

○「何事の式」といふ事は、後嵯峨の御代までは云（は）ざりけるを、近きほどよりいふ詞なり」と、人の申（し）侍（り）しに、建礼門院の右京大夫、後鳥羽院の御位の後、また内裏住みしたる事をいふに、「世の式もかはりたる事はなきにも」と書（き）たり。（一六九段、二二七頁）

とあり、「式」が『徒然草』成立当時の近世語であると考えられていたことが理解される。また、この文中に引かれている『建礼門院右京大夫集』の該当部分は、校本[8]を調べたところ、すべて「世のけしき」となっており、この事実からも、「後嵯峨の御代までは云はざりける」という言葉の信憑性が高いことが証明されよう。

しかし、この「式」が中世以後の新生語でないことも、周知の通りである。古くは『弘仁格式』などのように「規則」の意で用いられたものもあり、また、『千載集』の序や、『愚管抄』など、後嵯峨天皇の代以前に成立したものに、「何々の式」の形のものが、少数ながら見出される。だが、それらの意味は狭く、「定まった形式・規則」に限られており、また一般の和文には用例が見えないなど、やはり鎌倉初期の時点でこの語が広く使用されていたとは認め難いのである。

さて、この「式」が一般の和文に見えるのは、『弁内侍日記』における次の例が最初であると思われる。

○「吉田の使の帰りにはかならず女工所へたちいる式にてあるぞ」と申し侍りしかば、（『弁内侍日記新註　増訂版』二四頁）

『徒然草』の「後嵯峨の御代」という記述と、時代がほぼ一致した訳であるが、これ以後の和文にはこの語が散見されることからも、この頃から一般に広まったと考えるのが妥当ではあるまいか。また、『中務内侍日記』や『とはずがたり』には、

○御所さまの御しきもゆかしく悲しきに、（大修館書店『中務内侍日記新註　増訂版』六二頁）

○強ひて逃れつるかひなくなりぬる身の式も託つ方なく、（『とはずがたり全釈』九九頁）

のごとく、本物語に見えるような「様子・有様」の意を持つ「式」が見え、かかる意味は鎌倉前期におけるこの語には見られなかっただけに、その意味の広がりについても注目される。得られた用例数が少なく、今ここで「式」なる語の意味の変化

については詳しく触れ得ないが、前述のように、本物語においてはこの語が三通りの意味に用いられており、その文章が書かれたのも、この語が広く行われるようになった時代、即ち後嵯峨天皇の時代より後ではないかと考えられるのである。

V　～たがる

願望を表わす接尾語「～たがる」は、次の一例が見える。

○中納言おもふ心ざしふかくて、この大将にせちにたてまつりたがる。さるべき女ばうしてかすめきこゆれど、（金子本四七五頁）

この語は、主観的な願望を表わす「たし」に対して、他人の願いを客観的に表現する場合に用いられるものであるが、岩井良雄氏[9]はこの語について、

○鎌倉時代は新生の俗語として文章には多く使用しなかったものと考えられる。

とされ、また、

○鎌倉時代には連用形・連体形が見える。その他の活用形は、以後の成立である。

としておられる。事実、鎌倉時代成立とされる作品中、かかる語を見出し得たのは、次の四作品六例のみであった。

○宇治拾遺物語

・御見参にいりたがり候。（一八四頁）

○古今著聞集

・たゞ、きゝたがる人を悦につかうまつれば、（二一七頁）

・楽をきゝたがりけるこそあはれに侍れ。（三九〇頁）

○雑談集

・チト物マイリタガリケル時、（三弥井書店刊、中世の文学『雑談集』一〇八頁）

○とはずがたり

・女どもの、見参したがるが侍に。（『とはずがたり全釈』二四二頁）

・絹障子を張りて絵を描きたがりし。（同右、六三五頁）

これらはすべて、岩井氏の述べておられるように、連用形または連体形である。こうした中で、本物語に見える「～たがる」は文末に用いられており、終止形であるとも考えられる。しかし断定はし得ず、またこの語自体の使用開始は、『宇治拾遺物語』に用例が見えることから、遅くとも十三世紀前半であると考えられ、だとすれば、終止形が鎌倉末期までに成立した可能性も否定はし得ないであろう。したがって、この一例を以

て直ちに本物語の成立を室町時代にまで引き下げることは早計であるが、王朝物語でありながら、こうした俗語を交じえていること自体に、本物語の成立がかなり下ることがうかがえるのである。

Ⅵ　念なし

本物語において、「念なし」なる語は八例を数える。

A、さばかりくまなかりしとの、御心地に、御らむじすぐす、さんやは、いとねんなきさまになりにけり。（金子本四四二頁）

B、さま〳〵見所あるなどをば、げん三位、この御めばかりはねんなしとて、（同右、四五五頁）

C、さもおぼししらずば、ねんなくかひなからむ。（同右、四七四頁）

D、まことに恋ちゆかしき名にしほひて、ねんなき程に思ふさまなる所〳〵の御心の中、（同右、四七九頁）

E、二品宮の御中のねんなさを、さもありかたくと、いよ〳〵とのに御心よせはひきぬへし、（桂宮本三一一頁）

F、いとたいらかにとりあへぬほとにねんなくて、又おなしさまのひめ君にてをはしますを、（同右、三四二頁）

G、この御なからひとものめてたく思ふさまにねんなくつくりあはせたらんやうにをはしますめるなかに、（同右、三四七頁）

H、いとねんなくとりあえぬ程にて、をとこにをはするほとのめてたさそ、（同右、三五七頁）

この語は鎌倉時代以後広く行われたと覚しく、多くの作品に見られるが、平安時代の用例は見えない。小学館の日本国語大辞典は、この語の意味を次の五種に分類している。

①考えない、考慮しない。
②無念である、口惜しい。後悔する。
③容易である、たやすい、簡単である。
④思いがけない、意外である。多くは期待していた以上の好結果の場合に用いる。
⑤心残りがない。

右の分類に従えば、本物語の用例の場合、Aは①に、Cは②に、F・Hは③に、B・D・E・Gは④に、それぞれ該当しよう。

では、他の作品中における「念なし」についてはどうであろうか。見出し得た用例は一五作品三〇例に上るが、それらを本物語の用例とともに前述の①～⑤の意味に分類、用例数を示し

たのが〈妻三〉である。

〈妻三〉から理解できるように、①と②の意味は鎌倉初期から見えるものの、③は『古今著聞集』以後、④の意味は鎌倉末～南北朝期成立かとされる『風に紅葉』以後にならなければ見出せない。特に④の意味については、謡曲や狂言に、「これは念なう覚えて候」「念なう早かった」といった形で多く見られ、中世的な色合いの濃いものであると言えよう。また、③の意における用例をいま少し詳しく見ると、『とはずがたり』までの作品におけるそれと、『太平記』におけるそれとの間には、さらに微妙な意味の相違が見られる。次に例を示す。

○古今著聞集

・くゝりにかけてとりたらん、念なし、いころしたりといひて、弓の上手のよし人にきかせんと思て、（四四〇頁）

大系本では、この「念なし」に「たやすいことで、残念なことだ」と注をつける。当該人物の意思や期待に反して「簡単」なのである。また『あさぢが露』では、

○承け引く気色ふたたびとなきに、少将ききて、『あまりこそ念なからめ』と思ひ給へど、諫りつべきことを聞えたれば、（桜楓社刊『あさぢが露の研究』一三四頁）

とある。主人公中納言の意を受けて、とある荒屋の姫君に彼の意向を伝えた少将だが、姫君がいとも簡単に喜んで承諾したので、やや困惑の態――といった場面である。この場合の「念なし」は、予想に反して簡単すぎたのであり、軽々しい姫君に対しての非難めいた気持ちが込められている。従って、前の例と同じように、「残念」に近い意味を持つと解し得よう。次に『とはずがたり』の二例を掲げる。

a、漏らしぬるも念なくとさへ覚え侍れども、（『とはずがたり全釈』一〇三頁）

b、はやうちとけ給にけりと覚ゆるぞあまりに念なかりし。（同右、一六四頁）

aの「念なし」については、『とはずがたり全釈』（中田祝夫氏監修）では「たやすい事」と訳し、『問はず語り研究大成』（玉井幸助氏著 明治書院刊）では「残念な事」と訳す。どちらともとり得るが、前後の文から判断すると「残念」の意が込められているようである。bは、斎宮が後深草院を強く拒むことなく、あっさり受け入れてしまったことに対する作者の非難である。ここも、全釈では「残念だった」、研究大成では「あっけなかった」と、解釈の違いが見られるが、「簡単すぎて残念であった」の意と解して良かろう。

〈表三〉「念なし」の意味について

分類／意味／作品	①考慮しない	②後悔すること無念である	③簡単であること容易である	④思い外結果であること思いがけない	⑤心残りがない	合計
保元物語	1					1
平家物語		2				2
後鳥羽院御口伝		1				1
弁内侍日記		1				1
古今著聞集		3	1			4
あさぢが露			1			1
いはでしのぶ		1				1
中務内侍日記		1				1
とはずがたり		2	2			4
恋路ゆかしき大将	1	1	2	4		8
風に紅葉		1		2		3
増鏡		1				1
太平記			4			4
竹むきが記		2				2
夢の通ひ路	1					1
義経記		2		1		3
合計	3	18	10	7	0	38

注……本表を作成するにあたっては、大系・全書本等の注、並びに各種辞書等を参照した。表中の数字は用例数を表わす。

このように、『とはずがたり』以前において、「簡単である」と解し得る「念なし」には、すべて「残念である」、或いはそれに近い否定的な意味が込められている。

ところが、『太平記』では、そうした否定的な意味を含まないものが見られる。

a'、ゲニモ大手ノ楫ヲバ、夜昼三日ガ間ニ、念ナク掘リ崩シテケリ。（一、二二六頁）

b'、卒都婆ハ無念抜ニケリ。（二、九六頁）

a'については、大系本に「思ったより楽に」と注があり、b'についても同様の解釈が成り立つ。これらの例は、それ以前の場合とは違って否定的な意味を持たず、むしろ好結果に近い意を表わしているといえよう。

以上の事を合わせ考えると、「念なし」は、時代の下降につれて、次第に「好結果」を表わす場合に多く使用されるようになったと考え得るのではなかろうか。

こうした中で、本物語においては、前述のように、「好結果」やそれに近い意味を持った「念なし」が多く見られ、この物語の成立がやはり鎌倉中期以前には溯り得ないことを感じさせるのである。

Ⅶ　日柄

「その日の吉凶」という意の「日柄」が、本物語には一例見える。

○六月一日ごろ、日がよき日、右大将よしのゝおとゞへわたりそめ給。（金子本四四一頁）

平安時代にはこの語は見えず、同じ意味の語として「日次」を使用するのが通例であった。この「日柄」は、中世に入っても鎌倉時代には見られないようであり、調べた範囲では、元亀二年本『運歩色葉集』に、

○日柄　（臨川書店刊、『元亀二年本運歩色葉集』三四〇頁）

と一例が見えるのみである。現代通行の古語辞書類も、長尾為景（一五三六年没）譲状の他、御伽草子などの例をあげる程度で、鎌倉時代の例は見えない。この語は、或いは鎌倉時代にはまだ行われなかったものであろうか。だとすれば、本物語の成立が室町時代にまで下る可能性も、やはり皆無であるとは言えないであろう。

Ⅷ　面々

「各自、めいめい」の意を表わす「面々」という語が、二例

見える。

A、いなび給はずことうけ申給て、めむ〳〵にきこえ給に、

（金子本四四〇頁）

B、猶いかなる人のさまなれは、かくめむ〳〵にまよふらん

（桂宮本三四五頁）

この語については、遠藤好英氏[10]の詳細な御研究があり、今その要点を述べさせて戴くと、以下の三点にまとめ得よう。

(1)、この語は漢語に見られるが、その意味は「各方面、いろいろの方面」であって、「各自、めいめい」の意味はない。

(2)、『弁内侍日記』より前の和文には「面々」は見出し得ず、同じ意味の語としては「おもておもて」が広く通用していた。

(3)、和文に見える「面々」は、「おもておもて」が漢字に表記されて「各人」の意を持つようになった和製漢語であると考えられる。

この語は、黒川本『色葉字類抄』にも見えるが、平安時代の和文には「面々」が見えないことから、この場合も漢語における意味であると解し得よう。

さて、この「各人」の意味における「面々」は、『保元物語』『海道記』に鎌倉前期の用例が見えるものの、和文に関しては遠藤氏の述べておられるように、『弁内侍日記』以前の用例は見出し得ない。また、これとほぼ同時期（一三世紀中頃）成立かとされる『岩清水物語』[11]に、

○なこりをしむへきにはめん〳〵にいとまこいて、（風間書房刊『中世物語の基礎的研究』三一九頁）

と一例が見え、この時期前後から和文にこの語が用いられるようになったと考えてもよいかと思われる。これらの作品以後になるとこの語は広く行われたと覚しく、用例の見える作品は枚挙に暇がない。次田香澄氏[12]によれば、鎌倉末の『とはずがたり』には実に三四例も見える程で、この語の和文への浸透度がうかがえる。

以上のことから、「面々」なる語の和文における使用開始時期は、一三世紀中頃と考え得るのではなかろうか。

Ⅸ　病は心

特殊な語句の一覧表には採り上げなかったが、本物語には前述のような語句の他に、「病は心」なる諺が見えるので、次に示す。

○（前略）まことに御心のそこよりおこたりはて給たらば、うれしゝ」とほゝゑみてきこえ給へば、「やまひは心とし

侍べき事か」と、にがえみながら、（金子本四七一頁）

女一宮への恋に悩んですっかり意気消沈、病にかかったような副主人公・内大臣を、恋路関白が慰める場面である。この諺は、「病は気から」「諸病は気より」と同様、「病は気の持ちよう一つで良くもなり悪くもなる」の意であるが、かかる意味を持つ諺は、平安朝の仮名文学や、諺集の『世俗諺文』にも見えない。

そこで問題となるのは出典であるが、現代の諺辞典類は、漢代成立かとされる中国の医書『素問』の、

○百病生レ気。

をあげる。この書の我が国への伝来は古く、服部敏良氏[13]は、天平宝字元年（七五七年）の『医疾令』に、

○資読ニ素問、黄帝針経、甲乙、脈経」、皆使精熟、其兼習業各令通利。

と、その書名が見えることを指摘しておられる。この一文に見られるように、『素問』は古くから医書として重んじられていたが、この「百病生レ気」、すなわち「病は心」の意味を持つ一節を有する作品は、『徒然草』『太平記』の、それぞれ一例のみであった。

○徒然草

・病を受くる事も、多くは心より受く。（一九三頁）

○太平記

・諸病ハ気ヨリ起ル事ニテ候ヘバ、（二、四四九頁）

『徒然草』の例は諺の形をとっておらず、『太平記』における例は医師の発言中に含まれるものである。したがって、かかる諺が一般にいつ頃から行われるようになったのか明らかではないが、近松の浄瑠璃などには盛んにひかれていることから、やはり中世、鎌倉後期～室町時代の間には広く行われるようになったと考えられるであろう。

結　語

本稿においては、『恋路ゆかしき大将』に含まれる王朝物語としては特異な語句といった面から、その成立についていささか考察を加えてみた。本物語が事実上孤本であるという点、また金子・桂宮本ともに室町末期の転写本であるという点を考えれば、当然その書写当時の通用語の混入や誤写、或いは詞章上の意識的な改変等の可能性も否定し得ず、これらの語句のすべてが本物語成立当初から存在したとは断定し難い。

しかしながら、そうした特殊な語句の種類・用例数は多く、

鎌倉時代物語の中でもその特徴は際立っている。そして、それらの語句の中には、鎌倉後期～室町時代のどの時代に属するのか明らかでないものや、「日柄」などのように室町期の作品のみにその用例が見出されたものも含まれるのである。

これらのことを考究しまとめると、『恋路ゆかしき大将』の成立の上限は、少なくとも現存本に関する限り、『風葉和歌集』（文永八年（一二七一年）以前には到底溯り得ないと考えられるし、その下限については、そうした特殊な語句の中、発生が室町時代に属するかと思われるものもごくわずかである上に、本物語が内容的にも王朝物語の系列下にあることや、夙に指摘されている引歌の問題[14]、現存本の書写年代等々[15]を考慮に入れると、室町前期を下るとは考え難い。

以上のように、本物語の成立は文永八（一二七一）年以後、室町前期頃までと考え得るのではなかろうか。

注（1）三谷栄一氏校註、日本古典文学全集『落窪物語　堤中納言物語』（小学館）

（2）近藤敬美氏「鎌倉時代における形容詞の敬語表現について――金沢文庫古文書を中心にして――」（『名古屋大学国語国文学』第三〇号、昭47・6）

（3）『宇津保物語本文と索引』（昭48・3　笠間書院）本文編三二八頁二行目。

（4）工藤進思郎氏は「『夢の通ひ路物語』成立考（『北住敏夫教授退官記念日本文芸論叢』昭51・11　笠間書院）において、『夢の通ひ路』の成立について「後醍醐天皇の崩御した延元四年（一三三九）を相当下る時期でなければなるまい」とされ、小木喬氏は『別本八重葎』を「江戸時代の偽作ではないか」と疑問視されると同時に、『松陰中納言物語』の成立について「これも後世の偽作ではないか」（『散逸物語の研究　平安・鎌倉時代編』昭48・2　笠間書院）としておられる。

（5）佐藤亨氏『近世語彙の歴史的研究』（昭55・10　桜楓社）二二四頁。

（6）北住敏夫氏「余情と景気」（『日本文芸の理論』所収、昭19・8　弘文堂書房）

（7）佐藤喜代治氏『講座国語史三、語彙史』近代の語彙の項。（昭46・9　大修館書店）

（8）井狩正司氏『建礼門院右京大夫集校本及び総索引』（昭49・4　笠間書院）

（9）岩井良雄氏『日本語法史鎌倉時代編』（昭46・11　笠間書院）一七四～一七六頁。

（10）『講座日本語の語彙4、中世の語彙』（昭56・11　明治書院）一二三～一二六頁。

（11）通説では、この物語の成立は一二四九年以後、一二七一年以前の二二年間とされている。

（12）次田香澄氏「とはずがたりの近代的性格」（『文学語学』五七号、昭45・9）

(13) 服部敏良氏『奈良時代医学の研究』(昭55・10　科学書院)一〇九頁。

(14) 金子武雄氏は、『物語文学の研究』(昭49・4　笠間書院)の中で、最も新しい引歌として新古今集所載の二首をあげておられる。

(15) 『物語文学の研究』並びに桂宮本叢書解題によれば、金子・桂宮本ともに書写年代は室町末期頃と推定されている。

(付記)

本稿は、昭和五十八年度中古文学会春季大会(金城学院大学)において口頭発表したものを、改めて加筆、修正したものである。その折、数多くの貴重な御教示を賜わった松村博司、石川徹、森本元子の各氏に厚く御礼申し上げる。